

国際キャリア学部における日本語教育について

大里 泰弘

On FICD Teaching Japanese

Yasuhiro Osato

Globalization has had a great impact on language learning and teaching. Since the 1980s Grammar Method and Audio Lingual Method approaches have been swept away by Communicative Approach in the language classrooms. In terms of the world GDP standings, Japanese is still a minor language far from being an international one compared to English and Chinese. This paper aims to seek for a direction in teaching Japanese at FICD, FJU in a global social background.

キーワード：コミュニケーション能力 アカデミック・ジャパニーズ
アカデミック・スキルズ 読解 教養教育
日本語の教育

0 . はじめに

グローバル人材の育成を使命として福岡女学院大学国際交流学部があらたに開設され学生を迎えて2年度目が経過しようとしている。本学部の特色は「国際キャリア観の育成」「専門知識と国際性」「多文化共生環境」という3つのフレーズにまとめられている。目指すものは高度な語学力及び高度な一般教養ないし専門知識に裏付けられた批判的思考力の育成をとおしてグローバルな舞台で積極的にチャレンジする人材を育成することである。

グローバル教育の一義的目的は責任感を持って実社会で活躍することのできる人材として学生を育てることである。そのために教師は「学生が様々な実践的スキルを培い、豊かな国際性と幅広い知識を身につけ、社会の諸現象を多角的な視

野からとらえることのできる専門性を養うことのできる」環境を提供するという
ことを常に意識しておく必要がある。

1990年代以前に見られたイデオロギーの違いによる国境間の移動の制限は大きく姿を変え、現在ではIT革命と相まってヒト、モノ、カネ、そして情報の移動がボーダーレスになり地球の一角で起こったことが、遠く離れた「異次元の世界」に住むとでも言える人々の生活に瞬く間に影響を及ぼすということをわれわれは実感させられている。今に始まったことではないが、たとえば食の分野において世界規模で練り広げられたマクドナルド化などと並行して、より大きな経済活動に参加するためにグローバル言語としての英語の必要性は高まるばかりである。同時に、地球温暖化、酸性雨、及び有毒廃棄物処分など地球規模での取り組みが求められる諸問題がクローズアップされハードとしてのマザーアースの行方を案ぜざるを得ないという状況にある、ということはいわれわれが直視しなければならないグローバル化のもたらした負の面での変革である。

グローバリゼーションは言語教育にも変革をもたらしした。特に1980年代になり語学教育の場では従来の「文法訳読」や「オーディオ・リンガル」にかわって「コミュニケーション・アプローチ」の採用が強く求められるようになり教室も様変わりするということがあった。その潮流は英語か国語かといった言語の種別を問わない。

国際キャリア学部はキャリア育成を目標とする点ですぐれて実学的であると言えよう。「キャリア入門」あるいは「社会人入門」でも有意義な能力はコミュニケーション能力である。グローバルスタンダードである英語について特にこのコミュニケーション能力の問題一点を取り上げて議論がなされるということはむべなるかなである。こうした社会背景のなか留学生の日本語学習ないし日本語教育をどのようにとらえればよいだろうか。まず言えることは、GDPの規模に比例する形で中国語もアジア諸地域を中心として国際コミュニケーション全般で国際語としての地位を占めるようになったが、世界第3位のGDPを誇る日本国ではあるが言語領域での日本語は依然として少数言語であり、一般コミュニケーションにしてもビジネスコミュニケーションにしても、外国語を考慮せずに日本語のコミュニケーション能力を論じてその学習や教育のマクロ的な意義は見えてこない、ということであろう。教室の留学生たちは「日系企業への就職も考えている」という共通のキャリア意識は持っているので、ある日系自動車メーカーのア

ジア現地法人における採用の条件には「TOEIC600点以上、日本語能力試験2級以上」が掲げられていると学生に紹介して今年度の授業を開始した。

さて、こうした状況下産声を上げてまもない本学部の「留学生対象日本語教育」はどのような指針のもと展開されるべきか。本稿では読解教育に触れ留学生対象日本語教育の方向性を問うてみることにする。

1. アカデミック・ジャパニーズ、アカデミック・スキルズ

留学生向け教科書に「アカデミック・ジャパニーズ」という言葉が用いられるようになって久しいが、振り返って日本人大学生（特に新入生）向けの教科書あるいは授業科目には「アカデミック・スキルズ」「スタディ・スキルズ」などの言葉が頻繁に登場する。

アカデミック・ジャパニーズとは留学生が大学で教育を受け学習を行う際に必要とされる日本語の理解力、表現力を指して用いられる言葉である。それは単に日本語の単語力や文法力や読解力といった受信型言語能力を指すのではなく、学生が主体的に考え、状況に応じたコミュニケーション - 自己表出 - をおこなうことができるという発信型言語能力をも射程に置く。

さらには、大学が象牙の塔ではなくキャリア形成へと繋がっていく人生における一つの過程としてとらえられる傾向の強い昨今においては、教師側として日々の大学キャンパスでの生活は何よりも「日常生活」の一部であるということ意識しておく必要があるように思う。留学生が必要とする日本語力とは日本での生活をおくる上で必要とされる日本語コミュニケーション能力も包含すると再認識して捉えるべきであろう。「アカデミック・ジャパニーズ」の命名論はともかく、それは留学生の大学における学習スキルだけではなく生活スキルをも内包する概念である。この日本語力スキーマは無論日本人学生にも当てはまる。

学生が主にキャンパスで必要とするスキルが学習スキルであり、受験や履修の手続きなどで要求される事務処理能力や授業に参加し講義内容を理解するあるいはテーマについて意見を発表するなどの学習活動能力が関与する。文系か理系か、何学部かの「専門知識」と同軸上にある（学術にかかわるすべての活動に関する）スキルである。

「日常全社会生活」から上に見た「学術生活」を除いた日常生活（電車に乗る、

コンビニで買い物をするなど)に必要なスキルが生活スキルであり、コミュニケーションを核とする言語運用能力や社会文化を理解し、異文化の壁を乗り越え調整するなどの社会適応能力が関与する。生活習慣や異文化に関する知識ないし法律や行政などを含む日常生活全般にかかわる社会知識と同軸上にあるスキルである。

アカデミック・スキルズとは主として日本人学生が大学で教育を受け学習を行う際に必要とされる日本語の理解力、表現力を指して用いられる言葉である。「自己紹介」「シラバスの活用」「講義の受け方」「演習参加のコツ」「定期試験の受け方」「図書館やインターネットでの資料収集法」「読書のすすめ」「レポートの基本」「プレゼンテーションの方法」などを授業の中で、したがって明確な学習意識を持って、学生は学んでいく。

一般に(当然に)アカデミック・スキルズには母語話者である日本人学生の生活スキル(電車に乗る、コンビニで買い物をするなど)という側面は含まれないが、留学生と接することによって彼らが抱える日本社会への適応の問題や生活習慣上の問題をともに考え「自文化の再分節」という学習スキル(専門知識)領域の経験学習をするということは起こりうる。

以上のようにみると、学習スキルに関しては留学生のアカデミック・ジャパニーズと日本人学生のアカデミック・スキルズには共通部分があることがわかる。同じ学習項目を母語話者が母語で学習するか非母語話者が外国語として学習するかの違いはあり留学生に母語話者と同等の言語能力を期待することはむずかしいが、大学における「日本語の教育」これを総称してアカデミック・ジャパニーズと呼ぶことも可能の究極の目標は母語話者も非母語話者もともに同じであるといえるのではないか。

アカデミック・ジャパニーズとアカデミック・スキルズの関係は従来より母語話者の日本語教育を「国語」と称し、留学生のそれを「日本語教育」と称したことと軌を一にする。母語か非母語かに関わらず、「オリエンテーションでどの授業をとるのかを考える」「掲示板や学生ポータルから情報を読み取る」「友人と情報について話し合う」などは学生生活に関連した重要イベントであり、それらの場面でのコミュニケーション能力という点で留学生には特別の努力が必要とされるにすぎない。

留学生にとっての「アカデミック・ジャパニーズ」は日本の大学学部での勉学に対応できる日本語力であり、その内訳は留学生活を送る上で支障のない日本語

によるコミュニケーション能力があるかどうかという生活スキルであり、また、自国で習得した知識を前提としながら、日本の大学で学習を行うための日本語能力があるかどうかという学習スキルである。教師にとってこれら二面のスキルを測定することが重要となる。日本語を使つてのコミュニケーション能力、日本語を媒体とした思考能力が問題なのであり、単に日本語そのものの知識・能力が問題なのではない。「読解」についていえば日本語の文章を目にして語や文法がわかるということだけではなく、図表やグラフなどの「視覚情報」の読み取り能力なども含め総合的に理解する能力を有しているかを見るのである。

総合的な言語活動、これこそがグローバル化社会で求められる日本語教育の姿である。

2 . コミュニケーション能力

第2言語習得理論でのコミュニケーション能力は、「文法能力」「社会言語学的能力」「方略的能力」「談話能力」という4つの極相により定義されることがある (Yule (1996))。

「文法能力」とは語彙や文法、音韻といった言語の規則に精通し運用できる能力である。言語使用能力の中核的部分は文法能力であるが、それは必ずしもコミュニケーションの成功には結びつかない。

そこでは、相手や状況、目的等を考慮に入れて適切な言葉の選択ができるなどの「社会言語学的能力」が要求されるのだ。場面に応じて敬語を適切に使うことができるようになるかは最も困難な日本語の学習項目の一つである。

また、意図した事柄を的確に伝えることができない場合、たとえばとっさの場面で「筆箱」が出てこず「ああ、鉛筆を入れるパック」などと、説明、言い替えをもってコミュニケーションを乗り切る、相手の言うことがわからない場合にわかりやすく言い替えてもらうように頼む、などの「意味の交渉」が必要になることがある。「方略的能力」とは意思疎通を効果的に行なうためのテクニックに関する能力である。

「談話能力」は結束性と一貫性によって統一されたテキストを形成する能力である。これらの能力は話し言葉のみならず書き言葉についてもあてはまることは言うまでもない。

日本語教育で問われる「コミュニケーション能力」はここに特定の意味内容が加わる。『大学生のためのアカデミック・ジャパニーズ』（佐々木 2006）は「単に日本語の文法力や読解力などの「受信型スキル」を伸ばすことだけではなく、あなた自身が主体的に考え、その場の状況を考えながらコミュニケーションをしたり発表する「発信型スキル」を伸ばすこと」を目標に様々なタスクを取り入れるかたちで編まれた教科書である。この点を前提としてかつて筆者は「「留学生の日本語学習」もスタート地点はひらがなやカタカナですが、それは、英語+もう一つの外国語という考え方に立って、「短期間で幅広い話題について書かれた日本語（新聞やテレビで使われるような）を理解し、使うことができる」ことを目標としています。そして国際キャリア学部での学習にあたっては、母国語、英語、日本語、いずれの言語を使うかに関係なく、「グローバル化社会の中での多岐にわたるテーマについて国際感覚や国際協調という広い視点からの理解の上に立って、コミュニケーションを図っていこうとする態度」を養ってください。」と大学ホームページに国際キャリア学部での日本語教育を紹介した。

日本語教育におけるコミュニケーション能力は主として発信者（encoder）からの視点でとらえられるものである。日本は「高コンテキスト」の社会であり日本語は「言わなくても分かる社会」の言語ととらえられてきたが、グローバル化が急速に進む現在、ビジネス社会においてだけではなく、「会話能力」と「説明能力」は最重要課題となっている。かつて日本人が大挙して海外へ旅行に訪れた際に土産店で挨拶らしい言葉を交わすこともなく商品を手に取りレジでお金を払ってお釣りをもらうだけで立ち去る姿が日本人のステレオタイプとして受け取られるというようなことがあった。多聞にもれず「聞く」「話す」能力の欠如である。日常定型場面では無言のコミュニケーションも成立するかもしれないが、話をしなければミス・コミュニケーションも生まれえないということもまた真なりである。佐々木（2006）で言われるその場の状況を考えながらコミュニケーションをしたり発表する「発信型スキル」を伸ばすことの必要性が妥当するのである。ただし、コミュニケーションという言葉が何を意味するかなどはほとんど考えないままに「日常会話に不自由しない語学力」をめざすという態でコミュニケーション能力を解釈していたのでは長期にわたり教室で日常レベルの会話を教えることに終始する可能性はありうる。

留学生は積極的に自分の考えを述べ、会話をしようとする。日本人学生との日

常コミュニケーションも SNS の普及、隆盛にともない留学生にとってこれまでになく好ましい日本語学習環境になっているのではないかと感じている。話し言葉レベルでの総合的言語能力はかなりの程度身につけていると考えられる。ただし、授業においては日本語を駆使してコミュニケーションを図る楽しさを求めることだけが目的であってはならないので本学部の日本語教育においては「ビジネス場面で要求されるコミュニケーション能力」をとりあえずの目標に立て授業を展開するようにした。

3 . 読解

話し言葉レベルでの総合的言語能力を習得している学生たちはそれなりに読解もこなしレポートも書くことができる。読解については「内容」にどれだけの関心を持っているあるいは持つことができるかというのが大きなポイントである。これについては、言語を問わず、新聞の政治欄、経済欄、文化欄、スポーツ欄、社会欄、テレビ番組欄の記事にどれだけの関心を持って読んでいるかをまず考えてみればよいだろう。

今述べたことは学校の授業についての話であり、たしかに学生の関心度の高低と日本語能力の伸長に相関があるらしいことは見てきた。いずれにしろ、読書不足が言われるなか「日常生活のなかで何のために、どんな文章を、どのように読んでいるか」を考え一人一人の学生が自分なりの「読み方」を獲得してほしいと思う。

読解の授業はおおよそ次の3段階に分けられる。

- ① 読解前の段階 読むための動機を与える、内容に関する既知の情報を確認するなどの導入
- ② 読解の段階 個々の学習者が自力で読む、問題に取り組む
- ③ 読解後の段階 内容が理解できたかの確認、説明 内容の要約、意見をまとめる

読書の場合われわれは何らかの目的を持ち、内容についてある程度の予測や期待をもって読み始める。ところが外国語学習の場合、読む目的が曖昧になり内容理解よりも語彙や表現の学習に気が向いてしまい、内容の予測などをはせずに未知の単語を調べていくというようなことがおこりがちである。内容理解と文法理解

のバランスには配慮する必要がある。

何よりも重要なのは、学習者に読む目的を意識させることであり、既得の知識を活性化させることにより読みの方向づけをすることである。具体的には、

- ① 読解テーマについて学習者が知っていることを自由に語らせる
- ② テーマ教材のなかでどのようなことが書かれているかを言わせる
- ③ テーマについての自分の興味、関心度
- ④ 読解テーマについての自国での取り上げられ方を言わせる
- ⑤ テーマについてどのようなことをもっと知りたいかを言わせる

といった作業でペアないしグループで話し合わせるなどの方法が考えられる。

時に、テーマに関するキーワードを取り上げ内容の予測をさせることは、幼児が「テレビ」を分節、認識するかのように、語彙習得という文法相から知識・教養の相へのめざましい橋渡しをすることがある。この導入段階においては「母語で知っていること」を最大限に活用してもらうことを忘れてはならない。「カタカナ語は英単語にあるいは漢字を使った語に」という辞書をめくるにすぎない一作業が大きな意味を持ち、学生の学習意欲の向上に寄与するというを多く目にしてきた。われわれは毎日の生活のなかでの交流を通してさまざまな知識や情報、経験を自身のスキーマとして形作っているが、読解テーマ教材という新たな情報に接することにより（“翻訳”も含めて）「スキーマの再構成」が生じうるのである。

読解とは文字を読んで情報を読み取る作業である。「読み」はどちらかというと専ら個人の精神活動に関わるものと思われ、コミュニケーション能力の欠如という場合にもまず「聞く」「話す」がとりあげられることはすでに述べた。しかし、コミュニケーション教育においては「読み」は読みにとどまらずコミュニケーションの能動的一過程であるという「読みのスキーマ」の再構成を学生、教師ともに意識してかからねばならない。教師は「読解において受信者（decoder）は自分のスキーマに照らし合わせながら文章の内容を再構築する」という能動的な読み方ができるように指導を心がけるべきである。

このコンテキストにおいて、日本語読解力を構成するコミュニケーション能力としての4つの極相を見ておこう。

まず「文法能力」については、文の構造を理解するための文法規則や文やテクストを構成している語彙の理解力が思いつくが、漢字仮名交じり文の識字力は必

須項目である。とりわけ漢字の音訓に習熟するということは「聞く」「話す」と密接にかかわってくるので習熟させる必要がある。

読解ではテキストのテーマやそのジャンルに関する背景知識を欠かすことはできない。またジャンルに応じて文章のスタイルが異なるので、レポート作成を視野に入れた「文体」の指導などが効率的であろう。学生のテーマに関する関心を惹起するということは「社会言語学的能力」の活性化である。

「方略的能力」の面では日常言語生活（新聞の読みなど）で習得しているスキルを活性化することが鍵である。スキミング、スキミング、未知語を前にしての推測など。

和歌や俳句などは別として、読解は通常テーマにまつわる結束性ないし一貫性の保たれた文の束を効率よく読み進めていく作業である。テーマに関する背景知識とともに、テーマとの関連性をもって書かれた文章の接続関係を理解するなどの「談話能力」も要求される。

授業をすすめるにあたっては、以上に加えて、「楽しむ」ことや「気分転換すること」も目的に入れた、たとえば日常の「読み」としての新聞に接することができるような、なおかつ、国際キャリア学部新入留学生のキャリア意識を明確にするよすがとなりうるような教材を使うことを意識した。主テキストとしては『ビジネスケースで学ぶ日本語』を採り上げた。採択の理由は著者高見智子氏の書かれた「はしがき」にほぼ言い尽くされているので概略を抜粋する。

本書作成のきっかけは2006年に遡ります。当時私は、担当していたビジネス日本語のコースで、ビジネスコミュニケーションを円滑に行うための練習やビジネスマナーの理解を深めるような学習を中心にしていましたが、学習者が自身の考えを表現し、お互いに学び合えるような学習の場を作りたいと考え始めていました。折しも米国のビジネス外国語教育では、ビジネススクールで行われるケースメソッドを使って外国語を教えるという提案がされ始めた頃でした。ケースメソッドがディスカッションという協働作業を重視した知的な探求をする学習法であるという点に着目しました。

教材を作成するにあたってはコンテンツのテーマ選びに工夫をしました。学習者に身近で、かつ取り巻く文化・社会・そして他の国の文化・社会まで考えることができる教材をと考えました。本書を使った学習は学生の主体的

な参加が重視されます。それぞれ違う個性や経験、意見を持った学生たちの協働作業を中心にした学びに、一つとして同じものはありません。「一冊の教材」が与える範囲をはるかに超えた、非常にダイナミックな学習となります。

教科書は全5ユニットからなり、ユニット1：日本コカ・コーラ/ユニット2：任天堂/ユニット3：コーチ/ユニット4：ウォルマート/ユニット5：トヨタ、という5つの企業を取り上げられている。商品開発、自国・他国でのビジネス戦略、及び企業活動の理念などを読み、読解作業を行うものである。

各ユニットは4つのステージで構成されている。

「ステージ1：前作業（話し合しましょう）」ではテーマと自分の日常生活の関連を考えたり企業に関するデータをみてグループで知っていることや意見を話し合う。実際にこのステージだけを「日本語会話」の学習テーマとすることもあった。たとえば、ユニット5のステージ1には次のような設問がある。

- 1 生活の中の車（あなたは運転免許を持っていますか、自動車を持っていますか）
- 2 トヨタ・ブランド（どんなトヨタの車を知っていますか、他のメーカーとイメージの違いがありますか、など）
- 3 就職・離職に対する考え方（定年退職するまで同じ会社で働きたいですか、働く会社を選ぶときに何を重視しますか、など）
- 4 トヨタの世界地域別自動車生産台数（グラフ：どの地域で積極的に生産していますか、など）
- 5 トヨタの世界地域別自動車販売台数（グラフ：どの地域で積極的に販売していますか、など）

ユニットによっては、表やグラフに加え速読（スキミング、800字程度）をさせ○×で大意把握をする練習もこのステージに配されている。

「ステージ2：読み物」では1600から2000字程度の文章を読み、○×による内容確認、内容についての文の完成（語句挿入）を行う。語彙表と重要文法項目（～そのもの、単に～、～とどまらず、など）が掲載されている。

「ステージ3：練習」には語彙練習、文法練習、表現練習の3タイプの練習がある。文法能力の確認から段落ごとの要旨をまとめて要約へ向かわせるという配

慮がなされている。読解から「ライティング」へとつながる形での学習展開も可能。

「ステージ4：タスク」には「ディスカッション」「意思決定」「問題解決」などのコミュニケーション練習がある。「ステージ1」との関係性を持たせ、たとえば「ディスカッションA：車を持つこと・使うこと」では「自分の国と日本」について「公共交通機関は便利ですか」などの問いを考え、話し合う練習を行わせる。先述の敷衍になるが、ユニットによっては「ステージ1とステージ4の抱き合わせ」で「日本語会話」の取り組みを行うことができる。

4．まとめにかえて 教養教育

コミュニケーションを考えるときに最も重要なことは何か。それは、いかに話し手の意思を相手に伝達できるにしても中身が伴っていなければ何にもならないという意味で、「一般教養を豊かにする」ことであると言われる。日本の企業人は即物的で、自分の担当することについてはそれなりに詳しいが、そこから一歩離れて、自分の国の政治や文化の事になるとモノを知らない場合が多いなどといったことがよく聞かれたが、事情は好転しているだろうか。こうしたことはビジネス面だけにかぎったことではない。

これは日本人向けのコメントであったが、国籍を問わずすべての学生が「様々な実践的スキルを培い、豊かな国際性と幅広い知識を身につけ、社会の諸現象を多角的な視野からとらえることのできる専門性を養うことができる」ためには積極的に自己形成に参画するという態度が要求されていることは間違いない。そうした下地に根付いてはじめてキャリア形成の展望も拡がりを見せるであろう。この意味において、「コミュニケーションの能動的一過程としての読み」が果たす役割は大きい。

学生は、日本人学生か留学生かを問わずに、自分なりの学習の場を作り出し、自分なりの学習方法を考え、自分なりに計画的に学習していこうとする真の意味での自律的学習者であることが求められる。日本語を使った教育の場で学生にこのような意図や能力を発見させる経験を与え自律的学習者としての向上をうながすことに成功しているということは充実した「日本語の教育」を提供できていることを明かすことになるであろう。

今年度の一年次留学生たちは「日系企業への就職も考えにある」という共通のキャリア意識はあるものの日本語学習目的はさまざまで（留学生の絶対数は少数であるが）ニーズの多様性・学習者の多様性ということをこれまでになく意識することが多かった。自律意識、個性が強く良い面もあったが、教室を本来の意味での自律学習の場としてふさわしいものにしていく必要があるということを感じさせられた。そのため、授業開始直後から当初シラバスを変更して、教材や副教材を多めに準備し、学習者のペースに応じて学習することを許容するようにした。さいわい全員が口頭で自分の意見を述べることに積極的であるので、ペアやグループの活動のなかで自分のペースに応じて学習スタイルを選択し易い教室活動を行うということに心がけた。ここに教室外での日本人学生とのグループ学習（チューター制など）の活用による相互援助グループ活動が加わるなどすれば双方にとって効果は倍増すると思われる。

学習スキルに関しては留学生のアカデミック・ジャパニーズと日本人学生のアカデミック・スキルズは共通概念であるという指摘をした。自分らしい自分を表現し、ともに協力し理解し合って生きることのできる能力の醸成、人間教育が大学に求められている。

1990年代初期、大学のキャンパスから「一般教育」が姿を消し「一般教養」は等閑視されたかのようにあったが、時代の要請によりコミュニケーション能力の獲得を基盤に国際的な視点や姿勢の獲得を目指す「教養教育」の必要性が唱えられるようになった。もう20年近く前のことになるが、大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について（1998年10月）」には、教養教育の理念を、課題探求能力育成の重要性という観点から、「学問のすそ野を広げ、さまざまな角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てる」とあらわした記述がある。該答申には「グローバリゼーション、グローバル社会、グローバル化」というカタカナ外来語は見当たらず「国際化」の文字が見えるだけだが、21世紀も十有余年を経て、ますます教養教育の重要性は増していると思われる。「高度な語学力及び高度な一般教養ないし専門知識に裏付けられた批判的思考力の育成をとおしてグローバルな舞台で積極的にチャレンジする人材を育成することが本学部の使命」として掲げられていることは冒頭に触れたが、これはとりもなおさず教養教育を謳った表明である。

教養ある人を育てるということは、多角的にものを見て自らを客観化し、問題発見をしながら正しい道を見いだしていくことのできる人を育てることである。国籍や言語の垣根を超えグローバル社会での共生という視点に立って、日本語教育と国語教育について総合的で普遍性を持った言語教育計画を考えるという「日本語の教育」の再構成」を認識すべき時にきていると言えよう。

参考文献

- Block, David and Deborah Cameron (ed.) (2002) *Globalization and Language Teaching* Routledge.
- 大学審議会 (1998) 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」文部科学省ホームページ
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm>
- 陣内正敬他 (2010) 『時事外来語で日本理解』関西学院大学出版会
- 国際交流基金 (2006) 『読むことを教える』ひつじ書房
- 三宅和子 (2003) 「留学生・日本人大学生のアカデミック・ジャパニーズとは」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』(平成14-16年度科学研究助成金(基盤研究A)研究成果報告書 研究代表者: 門倉正美) pp.101-112 2003年
<<http://academicjapanese.jp/dl/publications02/01/101-112.pdf>>
- 岡崎敏雄他 (1992) 『ケーススタディ日本語教育』おうふう
- 佐々木瑞枝 (2001) 『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』ジャパンタイムズ出版
- 佐藤望他 (2006) 『アカデミック・スキルズ』慶應義塾大学出版会
- 高見智子 (2014) 『ビジネスケースで学ぶ日本語』ジャパンタイムズ出版
- Yule, George (1996) *The study of language* 2nd. ed. Cambridge University Press

